

第 25 回 コムズフェスティバル 市民企画分科会 実施報告書

グループ名	ウエルエイジングクラブまつやま		
開催日時	2024年2月4日（日）10時～12時		
テーマ	あなたの人生にイエスを言おう！ ～心穏やかに“その時”を迎えるために～		
形式	講演とトーク&トーク		
講師等	講師：松山大学非常勤講師 山本 希 先生 専攻：哲学		
参加人数	女性23名	男性2名	合計 25 名

〈内容〉

＜開催の趣旨＞

平均寿命が90歳近くなり、多死社会を迎えています。しかし私たちはこれまで「死」を「生」の対極にあるものとし、忌み嫌いタブー視してきました。しかし、人は「死」を免れず、「死」に続く「老い」そのものも悲観的に捉える傾向があります。そこで、「死」と向き合い、「死」から「今＝老い」を考えることにより、「今」という時間を肯定的に捉え、残された老いの日々を心豊かに過ごすことを模索すべく、今回の講演会とそれに続くトークの時間を設けました。

＜第1部＞ミニ講演「老いと哲学 ～『死』に別の名前を与えうるか～」

講演ではハイデガーや村上春樹、正岡子規、セネカの言葉の中から「死」とそれゆえに「今」現在の自己存在の意味＝老いの意味を導き出す内容でした。その一部を講師のレジメから紹介すると、

ハイデガーは20世紀のドイツの哲学者だが、我々が生きているうちに「死」に眼差しを向けることによって、現存在としての終末である「死」が実は追いつくことのできない「可能性」であると述べています。

また、村上春樹はその小説「ノルウェイの森」の中で「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」と記しています。「死」は向こう側にある「生」の対極ではなく、私という存在の中に既に含まれているものであるとしています。

正岡子規は『病床六尺』の中で、六尺の狭い病床で6年に及ぶ闘病生活を経て子規が行きついたのは「余は今まで禅宗のいわゆる悟りというものを誤解していた。悟りということはいかなる場合にも平気で死ぬことかと思っていたのは間違いで、悟りということはいかなる場合にも平気で生きていることであった」と記しています。

ローマ時代の政治家であり哲学者であったセネカは、「生」の短さについて、「われわれにはわずかな時間しかないのではなく、多くの時間を浪費する。…われわれ自身が生を短くする…それが真相だ」とし、「生きることにとっての最大の障害は、明日という時に依存し、今日という時を無にする期待である」とも。



講師のまとめ

「死」というのは人間にとって決して彼岸に存するものではなくあくまでも此岸にまつわる事柄。私たち人間は生きている間に「死」について考えることができ、そこに様々な名を与え、思想を深めていくことができる。そしてかほど名をもつものではないとしても、そこから私たちは他者に向けて言葉を紡ぐこととなるのではないか。

〈参加者の感想〉

- ・哲学的に「死」についての講話がとても新鮮でした。「老い」とは「死」への眼差しという表現が心に残りました。
- ・哲学の話で自分のことがよくわかってきたように思います。
- ・参考になりました。
- ・講演が大変意義深く学びの多い内容でした。
- ・生と死について再度勉強したいと思いました。
- ・哲学と言うと高尚なものにとらえる人が多いが、本質的なことを論理的に考えていくことではないでしょうか。
- ・自分のこれからに役に立ちそうです。
- ・いろいろあっても気にしている時間がもったいないという気持ちになりました。
- ・青春時代、企業戦士の時代に戦より逃げる時に自分を納得させるために哲学の一部解釈が利用されたことを思い出した。
- ・ごく平凡ではあるが懸命に生きてきた自分が「それでいいんだよ」って慰められた気がした。

<第2部> トーク&トーク「あなたの人生にイエスを言おう！」

老いはある意味で残酷だ。加齢とともに心身の老衰は進み、知人友人との別れも増える。これまで当会では参加者が自分の今をもとにその時々テーマを話し合う「トーク&トーク」を重視し実施してきた。第2部では「自分と向き合う」ことが心の平安に通じるのではないかという仮説をもとに簡単な自己肯定チェックを行い、前段の講演も踏まえてそれぞれの人生をふり返り、残された時間を心豊かに過ごすためのきっかけづくりをめざした。



4つの島にわかれ、当会メンバーがファシリテーターとなって

1. 「今の自分」についてどのように思っているか
2. 理想としては残された時間をどう過ごしたいか
3. 現状の自分とこれからめざしたい自分の落差をどう埋めるか

をテーマに話し合いが行われ、トークの終盤では各島の意見を集約し発表し合ったが、個人情報にからむ部分もあり、トークの内容についてはここでは割愛する。

〈参加者の感想〉

- ・こういう機会があるといい。
- ・同世代のいろんな意見が聞けて楽しかった。
- ・参考にしたいと思える体験談などが聞けて参加して良かった。
- ・自己肯定感をもとうというパワーをもらった。楽しかった。
- ・今回の分科会をこれからの自分に役立てたい。
- ・第1部、第2部とも資料が充実していて良かった。

〈まとめとして〉

人類の夢だった“長寿”が現実となった今、逆に生き続けてあることの意味を問う時代となっている。その意味では今の時代は哲学的よりどころを必要としていると言える。

個人的な感想になるが、老いはまさしく「死」に続く道であるが、それを知ることによって平均的な日常に紛れて生きてきた自分が、最も自分らしくあり得る姿を思い描くことができるのではないかと。その意味で「死」への眼差しを向けながら生きる老いの日々は可能性そのものとも言えるのかもしれない。

今回は思うほどに参加者の数を広げることができなかったが、少人数であったことがかえっていい効果となって、講演の意味深さを真摯に受け止め、トーク&トークにおいても話合いを深めることができた。

